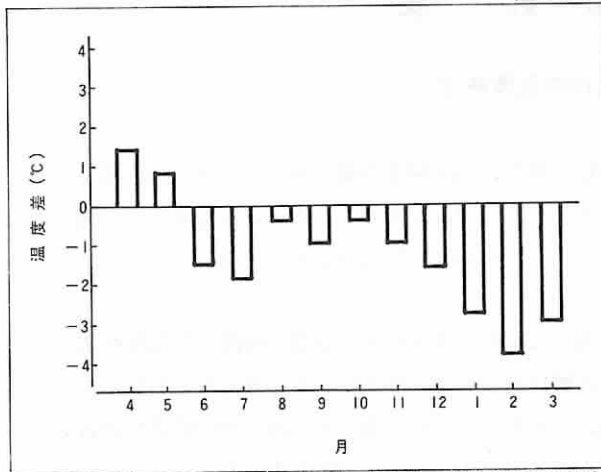


## 第9節 気象

### 神奈川の気象概況

- 春季** 本州付近を移動性高気圧が広く覆い、気圧傾度が緩やかになると、沿岸部では海陸風が発生する。4月下旬になって気温が上昇し、大気が安定すると、海陸風の発生とあいまって光化学大気汚染の発生する日がでてくる。
- 夏季** 関東地方は、6月中旬から梅雨に入り、本州南岸に前線が停滞する気圧配置になると、前述8節に記述した酸性雨の発生しやすい気象条件となる日がでてくる。7月中旬の梅雨明け後は、太平洋高気圧に覆われ、海陸風の発達が顕著となる。この時期大気が安定すると、光化学大気汚染が発生しやすくなり、年間で最も多い時期となる。
- 秋季** 太平洋高気圧の勢力が衰え、高気圧・低気圧の去来が活発となる。また、本州南岸に秋雨前線が停滞すると、秋の長雨になることがある。10月下旬までは高気圧に覆われて気温が上昇すると、海陸風が発生し、晴れて大気の安定した日には、光化学大気汚染の発生をみることもある。
- 冬季** 年間で最も雨量が少なく、晴天が続くため、空気が乾燥する時期となる。また、風が弱い晴天時には、放射冷却も加わって大気下層が安定するため、二酸化硫黄・窒素酸化物等の一次汚染物質が滞留しやすい状態となり、年間で最も濃度の高い時期となる。

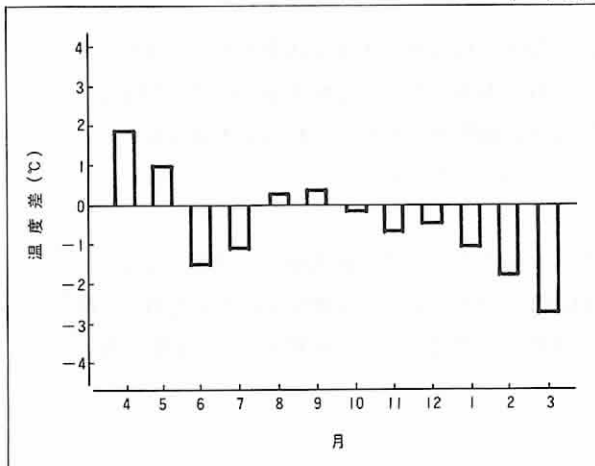
### 9.1 日最高気温の年間偏差（月間平均値） (58年度)



(資料：横浜地方気象台観測資料)

◁ 日最高気温の月平均値が平年値を超えたのは、4月、5月の2か月間であり、春季が暖かったことを示している。

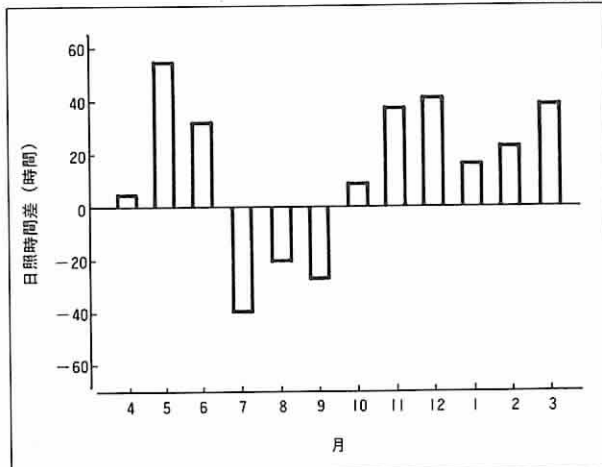
### 9.2 日最低気温の年間偏差（月間平均値） (58年度)



(資料：横浜地方気象台観測資料)

◁ 日最低気温の月平均値が平年値を下まわったのは、6月、7月及び10月から3月までの8か月間であり、梅雨期と寒候期が寒かったことを示している。

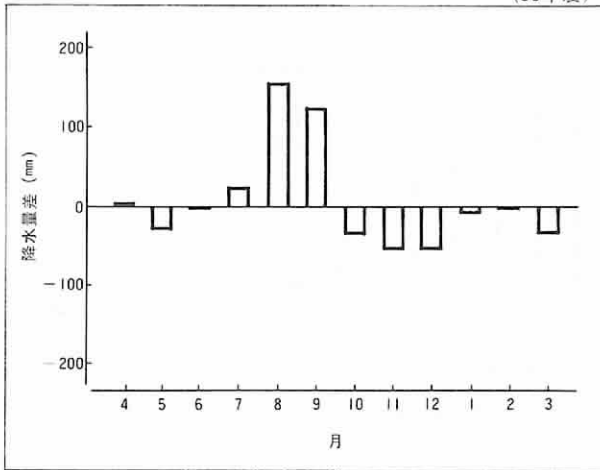
### 9.3 日照時間の年間偏差（月間平均値） (58年度)



(資料：横浜地方気象台観測資料)

◁ 日照時間の月平均値が平年値を下まわったのは、7月から9月までの3か月であり、夏季に日照時間が少なかったことを示している。また、平年値を超えたのは4月から6月までと10月から3月までの9か月であり、春季と寒候期に晴れた日が多かったことを示している。なお、年間の日照時間は2,178時間であり、年平均より175時間多かった。

9.4 降水量の年間偏差(月間値) (58年度)

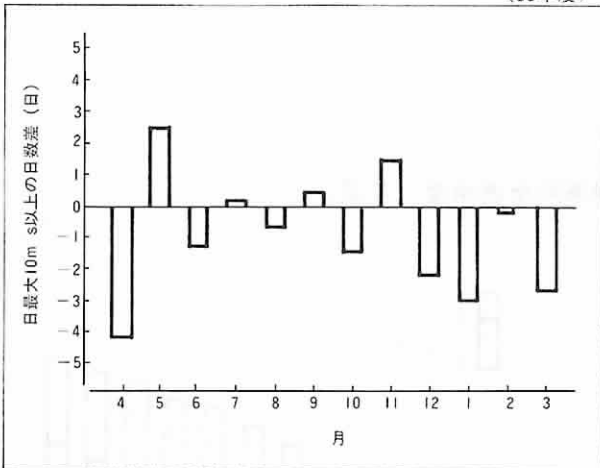


(資料: 横浜地方気象台観測資料)

◁ 降水量が平年値を他の月と比べて大きく超えたのは、8月と9月であり、夏季に雨量が多かったことを示している。

なお、年間の総降水量は、平年より99mm多い1,695mmであった。

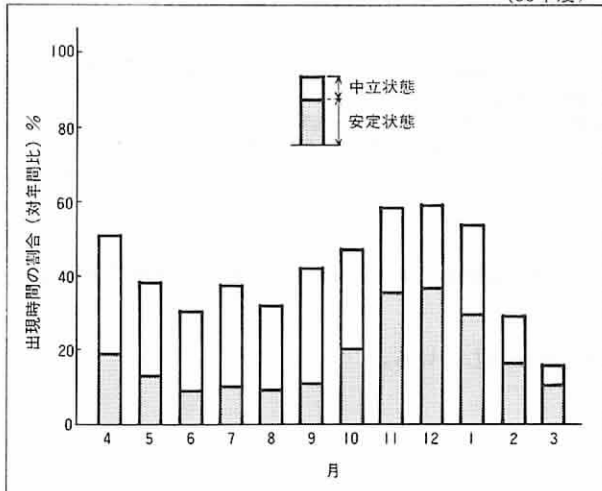
9.5 日最大風速10m/s以上の日数の年間偏差(月間値) (58年度)



(資料: 横浜地方気象台観測資料)

◁ 本県は、一般に春季及び冬季に風の強い日が多いが、58年度は、春季及び冬季に日最大風速10m/s以上の日数が少なく、年間の日数は、平年より11日少ない30日であった。

9.6 下層における大気安定度の推移(月間の安定度別時間数) (58年度)



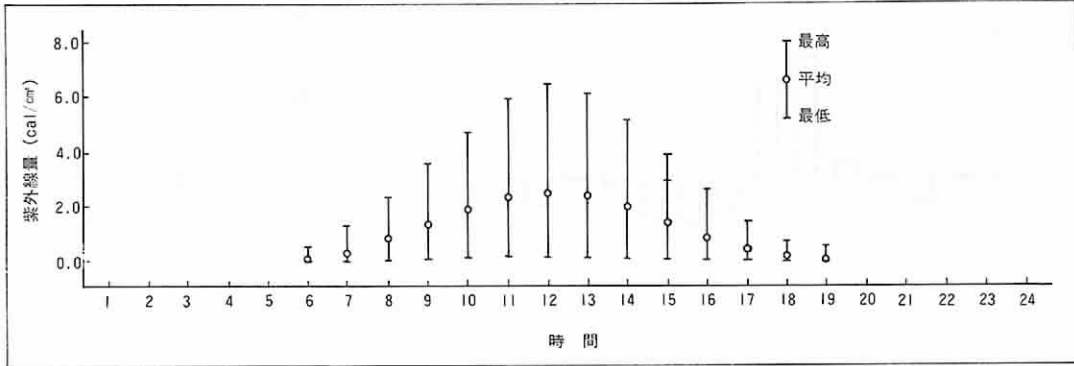
◁ 下層大気(地上100m以下)は、冬季に比較的稳定しており、11月、12月が最も安定している。

大気の状態が安定すると、大気中に排出された汚染物質は拡散しにくいいため、地上濃度は高くなり易い。

図は、横浜市鶴見区にあるテレビ神奈川の送信塔において毎時間観測している垂直方向の温度差の測定結果から月ごとに求めた大気安定状態及び中立状態の出現割合を示す。安定状態及び中立状態とは、地上125mと52mの温度差(125mの温度-52mの温度)から換算した100mあたりの気温減率 $x$ が $x \geq -0.6^\circ\text{C}$ (安定)と $-0.6^\circ\text{C} > x \geq -1.0^\circ\text{C}$ (中立)である状態を示す。

9.7 紫外線量の時間帯別強度（年間平均値）

(58年度)

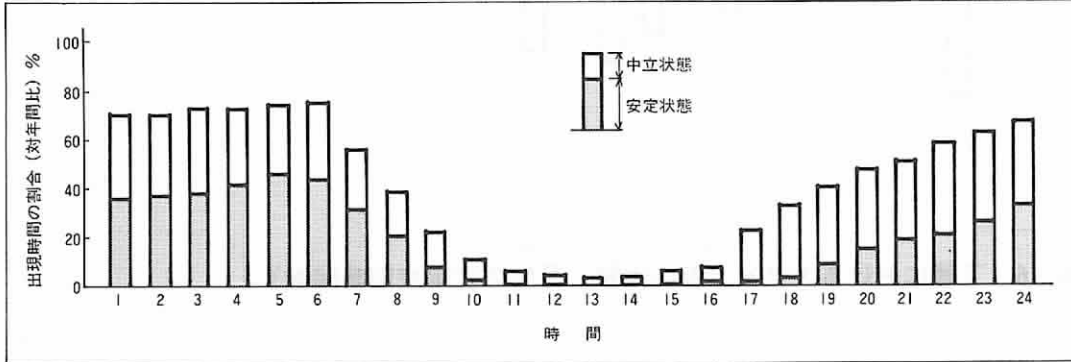


図は、紫外線の測定結果から時間帯ごとに求めた測定局別の平均値、最高値、最低値の全局平均を示す。

⌋ 県下の紫外線の日変化は、12時が最も多くなっており、時間的にはほぼ左右対照の日変化をしている。

9.8 下層における大気安定度の時間帯別出現頻度（年間）

(58年度)



図は、横浜市鶴見区にあるテレビ神奈川の送信塔において毎時観測している垂直方向の温度差の測定結果から時間帯ごとに求めた大気安定状態及び中立状態の出現割合を示す。

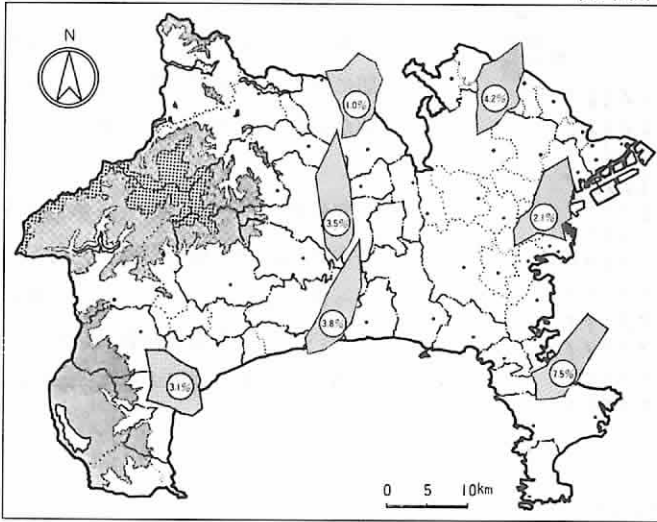
安定状態及び中立状態とは、地上125mと52mの温度差（125mの温度-52mの温度）から換算した100mあたりの気温減率 $x$ が $x \geq -0.6^\circ\text{C}$ （安定）と $-0.6 > x \geq -1.0$ （中立）である状態を示す。

⌋ 地上100m前後の大気は、深夜から明け方にかけて安定しており、日の出とともに急速に不安定な状態となる。

不安定な状態は日中続き、夕方から次第に安定度が増している。

### 9.9 風向頻度の地域分布 (年間)

(58年度)



◁ 日本付近は、冬季に北西の季節風が、また夏季に南東の季節風が卓越する。

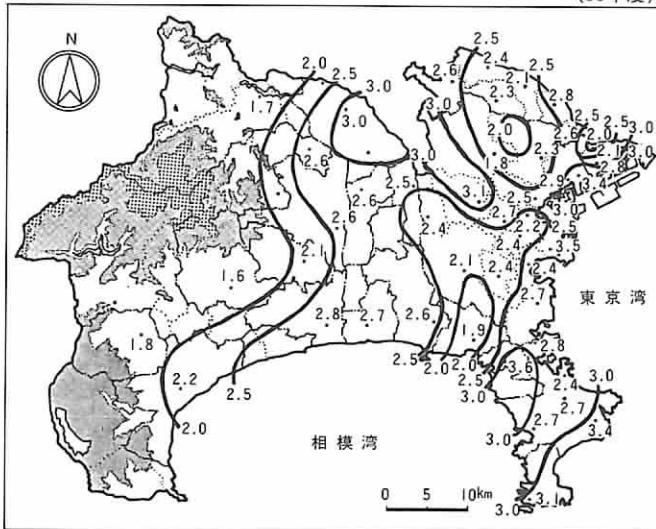
県下の東京湾岸部では、東京湾の軸に沿った北東と南西方向の風が多く、県中央部では相模川沿いの南北方向の風が多い。

また、西湘地域では、酒匂川沿いの北北西と南南東方向及び駿河湾方向（須雲川沿い）からの西南西の風が多くなっている。

図は、毎時間連続観測している風の測定結果から測定局ごとの出現頻度を示す。

### 9.10 風速の地域分布 (年平均値)

(58年度)



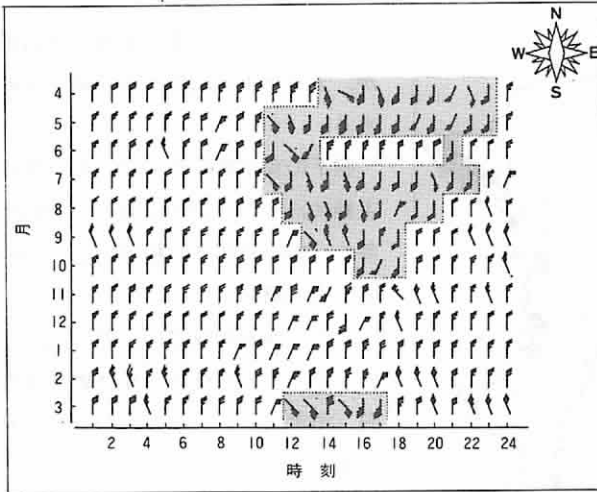
◁ 県下の風速は、県中央部を北から南に流れる相模川流域と東京湾沿岸の地域で比較的強く、山地等の影響を受ける県西部で弱くなっている。

図は、実測した風速の年間平均値から求めた、高度20mに相当する年間平均風速の地域分布を示す。

補正には、「風速の指数法則」 $\{ \text{基準高度の風速} = \text{実測の風速} \times (\text{基準高度} / \text{実測高度})^a \}$ を用いた。(a=0.25)

## 9.11 風の年変化（最多風向及び平均風速）

(58年度)



図は、厚木市役所における風向風速の観測結果から求めた、月・時刻別の最多風向及び平均風速を示す。

◁ 海風は、4月から8月の主に暖候期に発生し、海風の進入はほぼ9時頃から始まり20時頃まで継続している。

寒候期はシベリア高気圧から吹き出す北西の季節風の影響で、海風がはっきり現われていないが、寒候期においても、季節風の弱い晴れた日には、沿岸部で海風の発生が認められる。